OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	「のだ」の結果用法と過程用法
Author(s)	中田, 一志
Citation	日本語・日本文化. 2012, 38, p. 19-51
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/3770
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

〈研究論文〉

「のだ」の結果用法と過程用法

中田　一志

0　はじめに

本稿は、聞き手への伝達を表す「のだ」の中で発話行為の根拠を表す用法を除いた用例を対象にし、そのなかで「のだ」の体系を記述することを目的としている。「のだ」にはさまざまな用法があることは周知の事実であるが、それが体系的な記述の障壁になっていることは想像に難くない。したがってある程度正当な理由があれば局所的な現象の記述にとどめることも許されるのではないかと思う。

筆者が概観するにこの文末形式に関わる研究は3つの立場に分けられるように思う。一つは「のだ」がある状況や言語的な文脈についてなんらかの説明をすることを強調する立場（例えば、田中（1980）の「事実文」と「判断文」による説明、益岡（1991）の「帰結説明」と「背景説明」、奥田（1990）の「つけたし的な説明」と「ひきだし的な説明」）であり、もう一つは「説明」で片付けられない用法との両立を認める立場（例えば、田野村（1990）の「背後の事情」に対する「実情」、野田（1997）の「関係づけ」用法に対する「非関係づけ」用法）で、三つめは「説明」をより精密に定義することによって、その適応範囲を広げ、かつ正確さを追求し、統一的な説明を目指す立場（例えば、名嶋（2002）の「聞き手の解釈」優先、石黒（2003）の「充填機能」、菊池（2000）の「未共有の知識を補う」機能）である。

本稿の位置づけは、どの立場をとるか決する前の段階として、再度言語事実を正確に把握し、この文末形式の現象の記述をめざすものである。その意味では、「根拠のある説明」「理由の提出」「回想」「二重判断」「強調」といった用法を指摘した国立国語研究所（1951）や、「言換え」「一般化」「具体化」「対照」と「発話行

為」といった用法を指摘した姫野（1989）の延長線上にあるかもしれない。しかしながら、「のだ」の体系を明らかにしようという点ではこれらの研究と異なる。

1 本稿が対象とする現象

本稿では文末形式「のだ」を大きく分けて「聞き手への命令」「話し手の納得」「話し手の理解」「聞き手への伝達」「聞き手の理解」の5つの用法に分類する。そして「聞き手への伝達」用法のうち、発話行為の根拠を表す「のだ」を除いた現象を対象とすることをここで述べることにする。

1.1 条件1

紙幅が限られているので、5つの用法の根拠を詳しく論じることができないが、「聞き手への命令」については、田野村（1990）が「背後の事情」に対する「実情」を表す形式に分類し、野田（1997）が「関係づけ」に対する「非関係づけ」の形式に分類していることから、この形式が何らかの「説明」をしているものではないことは明らかであり、独立した用法として認めることは妥当だと思われる。つぎに「話し手の納得や理解」か「聞き手への伝達や理解」の区別は、「対事的ムード」と「対人的ムード」に分類した野田（1997）とある意味では共通するところがある[1]ので、容易に肯ける区別だと考えられる。さらに細分化された「話し手の納得」と「話し手の理解」、および「聞き手への伝達」と「聞き手の納得」については詳細に説明する必要があるが、前者については本稿の議論には直接関与しないので説明を割愛することにし、後者についてのみ若干の考察を試みたいと思う。

さて、本稿の分類による「命令」用法、「話し手の納得」用法、「話し手の理解」用法、「聞き手への伝達」用法、そして「聞き手の理解」用法の例はそれぞれ(1abcde)である。

(1) a. 新規のユーザー2軒つかむんだ。（命令）fu[2]
b. へぇー、休みの日なのに意外と熱心なんだ。（話し手の納得）no
c. こんな勉強したって、一体何になるっていうんだ。（話し手の理解）no
d. ちょっと今仕事中なんだ。（聞き手への伝達）fu
e. だから、ちゃんと診てもらってこいと言ってんだ。（聞き手の理解）fu

「のだ」を「のだった」にして、判断時点を過去にすると、発話時現在に関わる機能を持つ用法である「命令」「話し手の納得」「話し手の理解」および「聞き手の理解」を表す用法はそれぞれ（2abce）のように非文となるが、（2d）のように「聞き手への伝達」を表す用法は判断時点が過去であることも聞き手に伝達することができる。

（2）a. * 新規のユーザー2軒つかむんだった。
　　b. * へぇー、休みの日なのに意外と熱心なんだった。
　　c. * こんな勉強したって、一体何になるっていうんだった。
　　d. ちょっと今仕事中なんだった。
　　e. * だから、ちゃんと診てもらってこいと言ってんだった。

もっとも、「のだ」に「よね」を付加して「のだよね」にし、聞き手に対する伝達態度をはっきりさせたときは、（3abc）のように「命令」「話し手の納得」「話し手の理解」を表す用法はその機能を保持することができなくなるのに対して、（3de）のように「聞き手の伝達」および「聞き手の理解」を表す用法はその機能を保持することができ、この場合「聞き手への伝達」と「聞き手への理解」を表す機能の差異が際立たない。

（3）a. * 新規のユーザー2軒つかむんだよね。
　　b. * へぇー、休みの日なのに意外と熱心なんだよね。
　　c. * こんな勉強したって、一体何になるっていうんだよね。
　　d. あ、ちょっと今仕事中なんだよね。
　　e. だから、ちゃんと診てもらってこいと言ってんだよね。

（2de）（3de）から「聞き手への伝達」用法は「聞き手の理解」用法と比べるとより伝達機能が優位であると考えることができる。そこで本稿が対象とする現象の1つの条件は聞き手への伝達機能が優先される「聞き手への伝達」用法であることと規定する。

1.2　条件2

文末形式「のだ」には様々な発話行為の根拠を表す用法がある。この用法では発話行為を明示的に表す文が先行し、後続する「のだ」文がその発話行為を行う根拠を表すといったもので、比較的容易にその機能の判断が行える[3)]。したがっ

て議論を単純化するためにとりあえず迷いの生じない現象は一旦外しておいた方がよかろう。これが二つ目の条件である。

発話行為の根拠を表す「のだ」については久野（1973）や田中（1980）でも議論されている。発話行為とは依頼・命令、禁止、提案・勧誘、謝罪・弁解、意志表明、質問・確認など、話し手が聞き手に向けた発話がもつ力（force）のことである[4]。（4）では点線部が発話行為を表し、それに続く波線部がその根拠を述べる形になっている。なおそれぞれの発話行為は括弧に記した。

（4）a.「これよかったら食べてよ。今朝ね、畑でとってきたばかりなんだ。」（依頼）ll

b.「いいから来るな！　今度のオケは遊びじゃないんだ。」（禁止）no

c.「今度から歩くときは、これつけてみよっか。」「何ですか？　それ。」「ウエート。左右に傾くのを防いで、体のバランスを保ってくれるんだ。」（提案）ll

d.「ちひろ、すまない。お父さんな、今夜はそっちに行けないんだ。」（謝罪）ai

e.「今日も朝まで付き合ってくれるでしょう？」「帰る。俺も指揮の勉強がしたいんだ。」（意志）no

f.「なぜ私を呼んだんだ？　今まさにモチをつくところだったんだ。」（質問）ai

さらに（4）のように明示的に発話行為を表す言語表現を持つ形式の他に、姫野（1989）が指摘するように、主張や否定といった発話行為もあり、それに後続し、その根拠を示す「のだ」文も容易に認定できる。

（5）では話し手の真偽判断を主張する点線部に対して、後続する波線部の「のだ」文はその主張の根拠を示している。また、（6）では話し手の価値判断を主張する点線部に対して、後続する波線部の「のだ」文はその主張の根拠を示している。田中（1980）の「判断文」に対する「事実文」による説明、益岡（1991）の「背景説明」がちょうどこれに当たる。

（5）a.「それを旦那に見つかり、刺した。そうだろ！？　事件の晩、あんたを見たって人がいるんだ。事件現場には、あんたの指紋がベタベタ付いて

んだよ！」ai

b.「未解決じゃない。本当は解決していたんだ。」ai

c.「だったら、ここじゃない。」「ああ、この床は俺が張り直してもらったんだ。」ai

d.「集中しろ。いつもの冷静な僕に戻れ。大丈夫。この日のために死ぬほど練習してきたんだ。」no

(6) a.「脱水を甘く見ちゃいけない。命を落とすことだってあるんだ。」ll

b.「余計なことをしなくてもいい。この道場の名前に泥を塗らなければそれでいいんだ。」ai

c.「俺はな、ビデオもDVDも認めない。映画は映画館で見るもんなんだ。」ai

d.「遊びに行ってこい。」「いいよ、俺は。親父が生きてりゃいいが、おふくろは今1人なんだ。」fu

e.「なあなあ、千秋君、とりあえず1曲はコンチェルトをやらないか？」「いいね、コンチェルト。それは俺もやろうと思ってたんだ。」no

次は「のだ」文が否定の根拠を示す例である。ただし、否定には相手の主張を否定するものと相手が自らに向けた発話行為を否定するものがある。前者は（7）の波線部の「のだ」文のような反論であり、後者は（8）の波線部の「のだ」文のような拒否あるいは拒絶である。点線部は否定を表しているが、必ずしも必要とされるわけではない。

(7) a.「ホントに連れてきたのか？　ひょっとしてなんかの勘違いとかさ。」「そんなことない。アルジャーノンと一緒に来たんだ。」ai

b.「とても事務的なことだわ。体を汚すわけじゃないし、何かいけない？」「ううん。僕がどうかしてたんだ。」fu

c.「病気治せないで何が医者なんだよ！」「医者にできることなんてたかが知れてるんだ。」ll

d.「せんぱい、飛行機恐怖症って治らないんですか？」「昔から色々治療はしてきたんだ。」no

(8) a.「なあ、千秋、教えてくんない？」「やだ。俺だって色々忙しいんだ。」no

b.「ごろ太、今までごめんな。」「いいんだ、カズオ君。僕、宇宙に来て分かったんだ。人間は1人じゃ生きられないって。愛と友情がなきゃ、生きられないって。」no

1.3 対象とする現象

本稿が対象とする現象は「聞き手への伝達」用法であり、かつ「発話行為の根拠」用法でないものとする。

2 現象の概観

さて、対象とする現象がはっきりしたところで、言語現象を前もって概観しておくことにする。用例は主に2つの用法に分類される。一つは「のだ」の「結果用法」と名付ける用法で、先行する文がある一連の事象における過程的な事象を表し、「のだ」文にはその結果が表される、あるいは先行する文がある一連の認識や判断の過程を表し、「のだ」文には認識結果あるいは判断結果が表されるという用法である。もう一方は「過程用法」と名付ける用法で、「のだ」文が現況や言語的文脈が示す状況に至る過程的な事象を表し、その結果が必然的であることを示すもの、あるいは「のだ」文が認識や判断の過程を示し、その結果話し手によってとられる行為が現況であったり、言語的文脈が示す状況であったりする用法である。

他に「その他の用法」として分類するものがあるが、結局は結果用法の派生であるということを主張する。

3 結果用法

山口（1975）が「のだ」と呼応する副詞として「結局、要するに、つまり、一言でいえば、換言すれば、言いかえれば、簡単に言えば、手取り早く言えば」をあげているが、ここで見る例はこのような副詞を伴うのが多く、結果や結論部分に「のだ」が付くものである。奥田（1990）の「ひきだし的な説明」とも共通する部分がある。

3.1 事象の結果

「のだ」文が一連の事象の結果あるいは結末を示す用例をここで観察する。そ

の結果および結末に至る過程が先行文脈に明示的に表されているのは（9）（10）である。（9）では点線部のように過程的な事象が（波線部の「のだ」文で表されている）結果の直接的な原因となると考えられるが、必ずしもこのような因果関係が必要であるというわけではない。

（9）a.「地検から相当なプレッシャーかけられたみたいですからね。」「連続殺人の被告がもう1人殺して埋めたって公判でいきなりゲロしたんだ。」ai

b.「バカにしやがって！　だからクラシックはいやなんだ。やれ、リズムだ、音程だ、曲を譜面どおり正確に、テクニック、テクニック。いくら自分なりの表現をしようとしても、たった1か所の間違いを追及される！おまけに千秋のようなふざけたヤツがポロッと出てきて、やる気を失わせるんだ。」no

「のだ」文が一連の事象の結末を表す例も少なくはない。（10）では点線部は波線部の結末を直接引き起こす原因を表しているというわけではなく、単にその結末に至る過程的な事象が示されているにすぎない。（10a）の波線部の「のだ」文は聞き手が知らない結末、（10b）では予期せぬ結末が示されている。

（10）a.「覚えてなくて当たり前だけど、あの時、君と会った。それから追い出されたんだ。そういういい大学の人間じゃないんだ。」fu

b.「知らないおじさんだった。ゴミ捨て場のとこに来て、そしたら、背中ドンって押されて、ドアを閉められたんだ。真っ暗ですごく怖かった。」ai

また、過程的な事象が非明示的なものも多い。（11a）では副詞「せっかく」は何らかの過程を含意しているし[5]、（11bc）の波線部は紆余曲折の結末であるという読みになる。発話時以降に起こる事象の場合、（11a）の「振れるんだ」や（11c）の後の方の「手伝うんだ」を「振れるようになったんだ」「手伝うことになったんだ」に代えてもよいことからもこれらが事象の結末を表していると考える根拠となりうる。

（11）a.「この際、個人のテクニックをとやかく言ってもしかたがない。せっかくオケが振れるんだ。ベートーヴェンのこの素晴らしい曲を俺なりに

形にしてみよう。」no

b.「さっき例の部長が俺んとこ来てな」「部長が？」「採用は取りやめだって言うんだ。」fu

c.「あたしは実家のパン屋継ぐことになったんだ。」「僕も田舎の旅館手伝うんだ。みんな遊びに来てよ。」no

田野村（1990）なら（11）の「のだ」文のような例を「実情」を表すと言うだろうし、野田（1997）なら「非関係づけ」の「のだ」と呼ぶだろうが、相対する「背後の事情」や「関係づけ」との連続性をどのようにとらえるかという疑問が生じる。しかしながら、本稿のように「結果用法」として考えると、（9）のような過程と結果が直接的なもの、（10）のような間接的なもの、そして（11）のような過程が非明示的なものを連続的にとらえることができるという利点がある。

3.2 思考判断・認識の結果

「のだ」文が一連の思考判断の結果や認識の結果を示す用例をここで観察する。事象的な結果と異なるのは、思考判断や認識の結果の内容、つまり結論が「のだ」文で示される用例と、思考判断や認識の結果とる行為が明示的に「のだ」文で示される用例の2つのタイプがあるところである。益岡（1991）の「帰結説明」を表す「のだ」は、田中（1980）の「事実文」をもとにした「判断文」による説明を表すので、ここでいう「思考判断の結果内容」を表す「のだ」に対応すると考えられる。

まず、思考判断の結果を「のだ」文が表す用例を見てみる。基本的には（12）の波線部のように思考動詞を伴い、「のだ」文は思考判断の結果を表す。（12ab）の点線部のように思考過程、つまり根拠が明示的なものが基本である。（12c）のように非明示的なものもあるが、なんらかの思考過程を想像させることからも思考過程の関与が裏付けられる。

（12）a.「今日のスケジュールはどんな？」「そんなもんないよ。どうせ夜勤明けで大変だろうし、遠出も大変だろうし、相談して決めればいいと思ってたんだ。」fu

b.「もしも万が一受かるようなことがあったらさ、わたしが1年生で亜也姉が3年でしょ？　わたしいっぱい手伝えると思うんだ。学校の行き

帰りとか教室移動するときとか何か困ったとき、わたしいっぱい役に立てると思うんだ。」11

c.「あの あれ？」「うん、いい色だろ。」「ほんと。」「サイズ多分合うと思うんだ。似合うんじゃないかな。」fu

思考判断結果の内容だけが「のだ」文で表される用例もある。（13ab）では点線部が思考過程を明示的に表し、波線部が結果内容を「のだ」文で表している。（13c）のように思考過程が明示的ではないのもあるが、「自分の絵を見せると自分のことをとやかく言われるかもしれない。したがって、絵を見せたくない。」という思考過程と判断結果を容易に想像することができることからも、この「のだ」文は思考判断結果の内容を表していると言える。さらに、これらの例は、（13a）では「それでお前がいじめられていたんだと思う」、（13b）では「ふられてよかったと思う」、（13c）では「みせたくないと思ったんだ」のように適当な時制形式にした思考動詞を挿入することが可能である。このことから思考判断の結果であることを確かめられる。

（13）a.「とにかくあの大里華江さんはお前が好きなんだよ。ところが、彼女がいるとわかった。まじいよなあ。頭に来た。悔しい。お前が憎い。それでお前はいじめられてんだ。」fu

b.「一緒に暮らすとあいつも大変でね。」「そんなこと聞きたくない。」「あんた、ふられてよかったんだ。」fu

c.「（あなたの）度胸のねえこととか、気の小さいこととか絵を見るとよく見えてくる。」「だから見せたくなかったんだ。」fu

次の用例は思考判断の結果とられる行為が「のだ」文で表されている。（14ab）の点線部のように思考過程（根拠）が明示的に表され、結果「けんかする奴は気概があるにちがいない」や「音楽バカには経理はできないにちがいない」といった結論に達し、それをうけて起こした行為が波線部の「のだ」文で表されている。さらに、「けんかする奴は気概がある｛んだ／と思うんだ｝」や「音楽バカには経理ができない｛んだ／と思うんだ｝」のように思考の結論に「のだ」を付けることができることは、これらの例が判断結果を表しているということの傍証となるだろう。（14cd）のように思考過程が明示的ではない用例もあるが、本稿の考え

方を採用すれば容易にその思考過程を推測することができる。（14c）では決心するのに熟考したこと、つまり思考過程があったこと、（14d）では「娘が携帯電話を持つようになると、男と頻繁に電話を掛けあうようになるに違いない」、（14e）では「あいつは金持ちだから、金を貸すのに負担がないにちがいない」といった思考過程を経た結論があり、その結果波線部のような行為に至ったというように解釈できる。（14de）では「のだ」を「のに」に代えることができるが、なんらかの「説明」や「関係」で説明しようとなるとかなり複雑な手続きが必要に思えるが、本稿の考え方では他の例と同様に処理できるのである[6)]。

（14）a.「近頃はけんかするような奴は少なくなった。」「けんかだなんて …」「一目見りゃわかるさ。」「いや、これはちょっと色々わけがあるんで …」「いや、いいんだ。だからこそあんたに目をつけたんだ。」fu

b.「千秋君ってこういうことには疎そうというか鈍いというか、音楽バカ？　だから経理関係は僕が引き受けることにしたんだ。」

c.「決めたんだ。」no

d.（娘の携帯電話が不通だった。娘が電話で話している相手が彼氏だと分かって）「だから俺は携帯はダメだって言ったんだ。」ll

e.「お前、金持ちだって言ったからよ、だから俺、気楽に金借りてたんだ。」fu

次の例の波線部は思考の結果内容、つまり結論とその結論をもとにした行為が同時に表されたと考えられる。結論は「思う」の内容で、とった行為は「来る」である。ゆえに行為を省略して、「それだけ言おうと思ったんだ」としてももちろん文意は通じる。

（15）「いや、ちょっと学校へ来るなってよ、それだけ言おうと思って来たんだ。」fu

次に、認識について考えてみる。認識という作用は物事のあり方を知ることに重きを置いているのに対して、先に見た思考判断は物事の処し方を考えるものだと言える。したがって、思考判断の場合、結果内容とそれをうけた行為のどちらも「のだ」文で表されるのに対して、認識の場合、認識結果をうけてとられる行為に「のだ」が付いた例はないようである。おそらく認識作用の性質に起因する

と思われる。（16a）の波線部は思考や推論の結果至った認識とその内容が表されている。また、（16b）では初めの波線部は思考結果の内容、次の波線部は至った認識が示されていると考えられる。

（16）a.「被害者に性的暴行を受けた形跡はなく、所持品も盗まれてはいなかった。恨みによる犯行に違いないと確信したんだ。しかし、調べれば調べるほど、通り魔的犯行の疑いが強くなった。」ai

b.「愛だなんて言い出した途端何をした？　あのざまじゃないか。きっとこうなるんだ。わかってたんだ。ろくなことはないんだ。」fu

4　過程用法

前節では過程部分が明示的あるいは非明示的に先行文脈で表され、結果部分に「のだ」が付けられた用例を考察したが、本節では過程部分に「のだ」が付された用例を観察する。結果用法は事象の結果と思考判断・認識の結果に大別されたが、過程用法も「のだ」文が過程的な事象を表すものと思考判断・認識の過程を表すものを認めることができる。また、言語的文脈の状況より現在の状況が「のだ」文が表す過程を経た結果である用例が多いという特徴をもつ。この用法は田中（1980）の「事実文」による説明、田野村（1990）の「背後の事情」、益岡（1991）の「背景説明」、奥田（1990）の「つけたし的な説明」、野田（1997）の「関係づけ」と共通する部分が多い。

4.1　必然的状況への過程（原因・理由）

「のだ」文が過程的な事象を示し、結果的な現況あるいは言語的文脈における状況が必然的であるということを暗示するタイプをここで考察する。このタイプの結果には物事の状態の必然性を表すものと物の存在の必然性を表すものがある。

4.1.1　状態的状況

現在の状況あるいは言語的文脈における状況が必然的、非意図的あるいは非選択的であり、その過程的事象が「のだ」文で表されている用例を見てみる。

まず現状が必然的、非意図的あるいは非選択的な用例を見る。（17a）では現在「患者がベッドに横たわっている」という状況、（17b）では今「ヴァイオリンからひどい音が出ている」という状況、（17c）では今「走らされている」という現

況、（17d）では「なかなか電話が通じない」という現況、（17e）では「土屋に会いに行かなければならない」という現況は、波線部の「のだ」文で表されている過程的な事象（いわゆる原因や理由）を経た結果、必然的に成立する状況である。

（17）a.（意識が戻った患者に対して）「軽い肺炎を起こしかけたんだ。でも、もう大丈夫。」ll

b.（ひどいヴァイオリンの音を鳴らして）「驚いた？　僕、全然弾けないんだ。」no

c.「亮ちゃん？　どうしたの？」「知らないおじさんに追いかけられてるんだ。」ai

d.「何してんだ？　お前」「いや、（電話に）出ねえんだよ。いつだって混んでるんだ。」fu

e.「何時にどこへ行くの？」(中略)「土屋っていう俺を入社させるって言ってる部長が昼飯にアメリカ人を呼んだんだ。」fu

言語的文脈から想定される状況が必然的、非意図的あるいは非選択的である用例は（18）の通りで、点線部が言語的文脈による状況を示し、波線部の「のだ」文がその状況を引き起こす過程的事象、いわゆる原因や理由を表している。（18a）の波線部の「のだ」文は発話時以降の未来の時点における状況、（18bcd）の「のだ」文は発話時以前の過去の時点における状況を結果とする過程が示されている。

（18）a.「あ、今度の日曜1日僕いないからね。ワンゲルで高尾山行くんだ。」fu

b.「覚えてなくて当たり前だけど、あの時君と会った。それから追い出されたんだ。そういういい大学の人間じゃないんだ。」fu

c.「捜査は当初から極めて難航されたそうですね。」「最初のボタンをかけ間違えたんだ。」ai

d.「ボーイフレンドは綺麗だなんて言ってくれなかったし。」「遠慮してたんだ。」fu

このタイプの「のだ」文は（19）のように叙法副詞「実は」と共起する。田野村（1990）の「背後の事情」や益岡（1991）の「背景説明」という用語はこの特徴を捉えている。現況や言語文脈的に相手と共有可能な結果に至るまでにあった

未共有の事象を「のだ」文が表すからである。(17)（18）の「のだ」文にこの叙法副詞を付けてみても文意が変わらない。後で見る意図的状況へ至る過程を表す「のだ」文にこの叙法副詞を付けると文意を保てなくなるということとは対照的である。

(19) a.「仕方がない。正直にお話ししましょう。」「お願いします。」「実は…私はあの夜かなり酔っていてね、誤って捨ててしまったんだ。」ai

b.「実はね、土曜日の夜都合悪くなったんだ。」fu

c.「オドオドしてるなんてひどいよ。」「いや、実はね、うちの課長が変な奴なんだ。社員の男のところに女が訪ねてきたり、女のところに男が訪ねてきたりすると異常に気にすんだよ。」fu

必然的な状態的状況に至る過程を表す「のだ」文について最後に触れておきたいことは次のことである。その状況が抗しがたいことから、発話時における話し手の意識や態度には無念さや残念さからくる謝罪や断りのような気持ちが現れることがある。(20ab）では「のだ」文に謝罪の表現が後続し、(20c）では相手に断っておくような態度が現れてくるのはそのためだと考えられる[7]。

(20) a.「このまま終わる気は無論ないが、今君を入れる力が私にはなくなったんだ。すまん。」fu

b.「あたし10時から12時まで電話当番なんだ。」「うん、知ってるよ。」「悪いけど代わってくんない？」fu

c.「よろしくね」「わたしバスケットって初めてなんだ。」ll

現況あるいは言語文脈的な状況を結果として考えることが妥当だとすると、その状況を結果用法の「のだ」を使って表現できるか否か議論できるかもしれない。これらの用例の場合、結果的な状況は過程的な事象によって必然的に起こされるものなので、結果用法を用いると文法的ではあるが、(21）の波線部の「のだ」文は原文と同じ状況であれば冗長な印象をともなう。((21a）は（17a)、(22b）は（18c）を原文とする。）これはGrice（1975）の量の公理違反で説明できそうである。原文の方の結果は相手との共有情報であり、過程部分が未共有情報であるとすると、結果を表す（21）の波線部の「のだ」文はすでに共有済みであることから念押しや冗長な感じがするのであろうと考えられる。

（21）a. 軽い肺炎を起こしかけた（んだ）。だから、あなたはベッドに横たわっているんだ（よ）。

b.「捜査は当初から極めて難航されたそうですね。」「最初のボタンをかけ間違えた（んだ）。だから、捜査は難航したんだよ。」

4.1.2 存在的状況

話者がいる現場への方向性を示す「くれる」「くる」のような動詞に「のだ」が付いた文は話者のもとにその対象や移動の主体が必然的に存在していることを表している。したがって（22a）の「シュトレーゼマンの最新作」、（22b）の「このプレゼント」、（22c）の「僕」のように物や人物の紹介が先行する用例が多く見られる。物や人物から見ると、「のだ」文はその属性を注釈的に述べている文である。

（22）a.「これねシュトレーゼマンの最新作。ドイツの友人が送ってくれたんだ。よかったら。」no

b.「このプレゼントねえ実はお姉ちゃんから。全部お前たちのために亜也が選んでくれたんだ。」ll

c.「僕はヴァイオリンの高橋紀之。パリに留学してたんだけど、先月日本に帰ってきたんだ。」no

さらに（23）のように目的をともなう移動を表す形式に「のだ」が付くとそこにいる理由、つまり存在理由（raison d'être）を表すようになる。

（23）a.「そのことを言いに来たんだ。」fu

b.「やだわ、何？　こちら。」「お前探しに来たんだ。」fu

「くれる」「くる」以外にも「会う」の用例を認めることができる。この場合、二人（以上）がその場に存在するに至る過程（理由）が「のだ」文で表されている。

（24）a.「あ、一緒？」「電車で会ったんだ。」fu

b.「晴江と寮の前で握手してたでしょ。」「誰が言った？」「見たの。」「会えねえからさ、帰ろうとしたら、彼女に会って、そば屋行って、そば食ったんだ。」fu

必然的な存在的状況への過程を表す「のだ」文についても、結果部分を「のだ」

文に変えてみるとどうなるか考えてみる。予想どおり（25）の波線部は文法的であるが、冗長な印象を否めない。（(25a）は（22a）を（25b）は（24a）を原文とする。）このことから状態的状況であれ、存在的状況であれ、その結果的な状況は必然的であるためにすでに相手と共有されている情報なので、その結果をわざわざ表現すると量の公理に反するようになると言えそうである。

（25）a. ドイツの友人が送ってくれた（んだ）。（だから）シュトレーゼマンの最新作がここにあるんだ。

b.「あ、一緒？」「電車で会ったんだ。だから一緒なんだ。」

4.2　意図的状況への過程（理由）

前小節では必然的状況に至る過程を表す「のだ」文は過程的な事象を表すことを見たが、ここでは、過程を表す「のだ」文が思考判断や認識の過程を表し、現況あるいは言語文脈的な状況が思考判断や認識の結果生じた状況を表す用例を観察する。結果用法に過程的な事象の結果と思考判断・認識の結果の2つのタイプが認められたように、過程用法にも前小節で見た過程的な事象の過程と思考判断・認識の過程と考えられるような用例が存在する。ここで見るのは思考判断の過程で、認識の過程については次の小節で扱う。

話し手がある状況を意図的に生じさせるときには、必ずその主体の思考判断を介すると考える。3.2では思考判断の結果として概念的な結論に至ったところまでを言語表現する場合と、さらに先まで、つまりその後とる行為まで言語表現する場合があることを確認した。後者に対応するように、思考判断の結果とられる行為が現在の状況や言語文脈的な状況に現れ、その過程つまり思考判断の過程が「のだ」文に表されると考えるのである。この場合は、結果的な状況は主体の意図によって生じるのであるから、必然的状況が非選択的であったのに対して、選択的な状況であると言える。

一見、(26）の用例は必然的状況へ至る過程の例とよく似ているが、波線部の「のだ」文を思考判断の過程と考え、その結果とられる行為が状況に現れていると考えるのである。(26a）では「僕はPKをいつも外してしまう。今度の試合にはぜひ出たい。そのためにはひと以上に練習をしなければならないだろう」といった思考過程と判断結果があり、その結果をうけて現在の状況「1人で練習」が生じ

ていると考える。(26b) では「両親は一流が好きな人種だからきっと一流企業に入れなかったことを聞くとがっかりするだろう。そんな声は今聞きたくないから、電話しない方がいいだろう。」といった思考過程と判断結果があり、「今は両親に電話をかけない」という選択的な状況を作り出している。(26c) の「新しい調味料を使おうとしている」という行為は「井上さんがもってきたサンプルだから失敗しても構わないだろう」という思考過程と判断結果があり、その思考過程（理由）部分が波線部の「のだ」文になっている。また、(26de) は言語的文脈の状況が結果と考えられる例であるが、同様に点線部は結果的な意図的状況を示し、波線部の「のだ」文はその思考判断の過程を表している。

(26) a.「こんな時間まで1人で練習？」「うん、俺シュートがヘタだからさ、PKになると、いっつも外しちゃうんだよね。俺、今度こそ試合に出たいんだ。」 ll

b.「1人の時（電話）かけるよ。」「どうして？」「(両親は) 一流っていうとめっちゃくちゃ喜ぶ連中なんだよ。がっかりした声聞きたくないんだ。」 fu

c.「いいわよ。もったいない。」「(調味料を) サンプルがわりにな井上さんが持ってきたんだ。」「無理にあけることない。」 fu

d.「今日、何人かに新しいオケに入れてくれって頼まれたけど断った。今度のオケはその延長線上でやりたくないんだ。今できる最高のオーケストラを作りたい。」 no

e.「また研修？」「機械はどんどん変わるからレクチャーないとわかんなくなるんだ。」 fu

これらの場合、結果的な状況を「のだ」で受けても冗長的な印象を受けないというところが必然的状況の場合と違う点である。(27) の波線部は (26abc) のそれぞれに結果用法の「のだ」文を付加したものであるが、(21) や (25) のような冗長さはない。その理由は主体の意図によって制御可能となる状況であるので、結果的な状況が相手にとっても予測可能であったとしても、話者本人が自らその結果状態を言明することに不必要性を感じないからであろうと思われる。よって量の公理には違反しないのであろう。

(27) a.「こんな時間まで1人で練習？」「うん、俺 シュートがヘタだからさ、PKになると、いっつも外しちゃうんだよね。俺、今度こそ試合に出たいんだ。だから練習しているんだ。」

b.「1人の時（電話）かけるよ。」「どうして？」「(両親は) 一流っていうとめっちゃくちゃ喜ぶ連中なんだよ。がっかりした声聞きたくないんだ。だから今はかけるのはやめておくんだ。」

c.「いいわよ。もったいない。」「(調味料を) サンプルがわりにな井上さんが持ってきたんだ。だから使っているんだ。」

それと平行的だと思われるのが、叙法副詞「実は」との共起である。(26) のように意図的状況への過程を「のだ」が表すような場合、「実は」と共起する例は見られなかった。(26) の波線部の「のだ」文に「実は」を付加してみると、不自然な感が否めない。おそらく主体の意図で制御できる事柄とこの叙法副詞が合わないのであろう。

次の例は思考判断の過程と思考判断の結果内容が表されている例である。(28) の波線部が思考過程、点線部が判断結果を表している。(28a) では「芸能界から誘われているがどうしようか」といった思考過程、(28b) では「向こうに昔住んだ家があるからプラハに留学しようか、それともパリに留学しようか」といった思考過程を経た結果、点線部の結果に至ったことを示している。(28c) は波線部が思考過程を表し、点線部が判断結果内容そのものを示している例である。過程と結果ともに「のだ」文が使われていることに注意されたい。同様に、(28ab) の結果部分に「のだ」を付けて「～断るつもりなんだけど」「プラハに決めたんだ」としても文意が変わらない。

(28) a.「僕芸能界から誘いが来てるんだ。このオケに入れるならその話は断るつもりだけど。」no

b.「あっ、せんぱいどこの国に行くんですか？」「プラハ（に決めた）。向こうに昔住んでた家があるんだ。本当はプラハかパリかどちらか考えていたんだ。」no

c.「治せない病気はいくらでもある。その研究には時間がかかるんだ。だからこそ医者が必要なんだ。」11

思考判断の過程が「のだ」文で表され、その結果の行為が発話行為となる例も多く見られる[8]。(26) の判断結果の行為はいわゆる行為であったが、(29) では話し手の意志を表したり、相手に対して働きかけをしたりするといった発話行為である点に注意されたい。(29) の波線部の「のだ」文は思考判断の過程を表し、点線部はその結果をうけた発話行為をしめしている。(29a) では「僕はゲルハルムのオーディションを受けるから、ヴィエラ先生に会えるかもしれない」という思考過程、判断結果をうけて意志表明あるいは提案という発話行為を行っている。(29b) では「車で来ているから、ひとに邪魔されずに話ができるかもしれない」という思考過程、判断結果をうけて勧誘という発話行為を行っている。(29cd) では「新しいオケを作るから優れた奏者が必要だ。真澄は優秀な奏者だ。真澄がオケに入ってくれたらいいだろう」「僕たちは医者になるための研修生であるから、患者の亜也ちゃんから多く学ぶことがあるだろう」といった思考過程、判断結果をうけて依頼という発話行為を行っている。必然的状況の場合は謝罪や断りのような発話行為が後続していたが、意図的状況の場合は意志表明や相手に対する働きかけといった発話行為が後続することは注目に値すると思われる。

(29) a.「僕、留学先で今度ゲルハルムの受講生オーディション受けようと思ってるんだ。ヴィエラ先生と知り合いなんだって？　もし会えたら、何か伝えておくけど？」no

b.「車で来てるんだ。よかったら車の中でちょっと話できないか。」fu

c.「俺、新しいオケ作るんだ。プロを目指してるヤツに頼むのも何だけど、時間がある限りでいいから、ティンパニーやってくれないか？　真澄。」no

d.「僕たちね、これからお医者さんになるために勉強させてもらうんだ。よろしくね、亜也ちゃん。」ll

4.3 認識の過程

思考判断というのは物事の真偽や価値を判定することであるが、さまざまな課題を解決するためであると言えるかもしれない。それに対して認識は課題を解決するための道具となるだろうが、課題解決まで意図していない認知作用と考えられるかもしれない。3.2 で見たように思考判断の後とられる行為は「のだ」文で

表されるのに対して、認識結果の後とられる行為が「のだ」文で表される用例が見つからなかったのはそれ故だと考えられる。

したがってここでは認識の過程が「のだ」文で表される用例を見るが、すべて結果的な状況は認識済みという状況を表している。（30ab）の波線部の「のだ」文は視覚から情報を得たという過程を表しているが、その結果的な状況は知っていることであり、（30cd）の波線部の「のだ」文は聴覚から情報を得たという過程を表しているが、その結果的な状況はこれまた知っているということである。

（30）a.「昨日ここ通った時目つけたんだ。」fu

b.「この前、ゴミ置き場でいいもの見つけたんだ。」「ホント？　よし、行ってみようぜ。」ai

c.「千秋！」「お前ら！？」「こいつらからオーディションがあるって聞いたんだ。」no

d.「実習中なの。面会なんかできない。」「1時から2時までならいいって聞いたんだ。」fu

出会いの場面があることも「知っている」という過程になることから、（31）の波線のような「のだ」文も可能である。

（31）a.（木村を指さしながら）「音高が一緒だったんだ。」no

視覚や聴覚を通して認識するだけではなく、あれこれ考えて認識する場合もある。（32）がその例で、波線部の「のだ」文は認識に至る過程で思考したことが示されている。この場合でも認識結果はやはり「部下がだれかと一緒にいることが分かった」という認識の枠を超えることがないようである。

（32）「課長。」「うん？」「こちら、あの、知り合いの宮本さんっていいます。」「あ、そうか。一緒かあ。ハハ。いや、どうりで誰か来たんじゃないかなとは思ってたんだ。」fu

これらの「のだ」文が暗示する状況は非選択的なものではないと考えられる。なぜなら認識状態を続けることは意図的でなければならない。ややもすると忘却のおそれや意識の外におくおそれがあるものをそうしないというのは選択的であると考えられる。したがって（33）のように意図的な状況への過程を表す「のだ」文と同様に、その結果部分を「のだ」文として表しても冗長な印象を受けない。

（33）は波線部の結果用法の「のだ」文が付加されたもので、（33a）は（30a）が原文、（33b）は（31）が原文である。

（33）a. 昨日ここ通った時目つけたんだ。だから知っているんだ。

b. 木村と音高が一緒だったんだ。だから知っているんだ。

4.4 新状況への過程

これまで見てきた過程用法の「のだ」の議論では、結果的な状況の過程は原因や理由で置き換えてもよかったが、ここで見る「のだ」文は原因や理由とは言い難く、むしろ単純に過程として見た方がよいと思われる。

新しい状況が生じたとき、それまでの過程的な状況が「のだ」文で表されるという用例がある。（34）の波線部の「のだ」文にそれ以前の過程的な状況が表されている。点線部は新たな状況を表している。

（34）a.「応援するよ。」「本当？」「する」「元気出てきた。落ち込んでたんだ。」fu

b.「俺はそんな瞬間を夢見ながら昨日まではあきらめていたんだ。でも今確かに小さな身震いを感じている。」no

c.「カーテン冬のままだったんだ。やっと新しいのができてね。」fu

d.「1人じゃこんなとこ住めないが、2人で出し合えば何とかなる。彼女ひどいアパートに住んでたんだ。」fu

5 その他の用法

これまで観察したような結果用法や過程用法に分類しにくい用例をここで考察することにする。「のだ」文のなかには小矢野（1981）が指摘するように「別の立場、角度、視点」を表すような例や、姫野（1989）の「言換え」「一般化」「具体化」「対照」を表すような例、奥田（1990）の「つけたし的な説明」のなかの「具体化・精密化・いいかえ」あるいは「ひきだし的な説明」のなかの「一般化の判断」を表すような例が存在する。

これらの例は一連の事象の過程や結果、あるいは一連の思考判断・認識の過程や結果として考えにくいという点で共通しているのである。これまで見た例は対話例であっても連続的な事象あるいは連続的な思考判断・認識と見なすことがで

きた。そういう意味ではここで見る例には連続性を阻害するような要因があると言えるかもしれない。

もっとも典型的な状況はおそらく対話において話者が相手と「別の立場、角度、視点」（小矢野 1981）から物事を見た場合であろう。これまで見てきたように対話において連続性が保たれている例では、異なる表現主体であっても同一対象について一連の過程と結果を双方が共有していると考えられる。そう考えると、連続性が保たれない場合はつぎの5つの場合を想定することができる。異なる表現主体が同一対象に対して対立的な立場の場合、あるいは対立的とは言えないが別の角度や視点から述べる場合、さらに異なる表現主体が異なる対象について述べる場合、表現主体が同一であり対象も同一であるが、異なる側面について述べる場合、あるいは異なる表現レベルを述べる場合である。以下でそれぞれの用例を見ていくことにする。

5.1　異なる主体同一対象（対立的）

基本的には次のような形式をともなっている。(35) のように対話形式である。点線部が相手の主張であるのに対して、波線部の「のだ」文は同一対象に対する話者の主張である。(35abc) は否定と肯定、あるいは肯定と否定の対立である。波線部の「のだ」文は対立する主張を表している。(35c) の波線部の「のだ」文は相手が「客がいることに気づいた」という場面なので、その発話の前提を否定している。他に、(35d) のような「嫌だ」も対立的な主張となるし、(35e) のように相手が自分の価値を過小評価したのに対して、話者が波線部の「のだ」文のように評価するという対立的な「のだ」文もある。

(35) a.「もうそんな心配ないと思うけど。」「2人だけにするのは心配なんだ。」
fu

b.「かたい人ってそうなのよ。そういう同棲したりしてるひどい女に魅かれたりするのよ。」「ひどいって …」「ひどいっていうか荒れてるっていうか」「そんな人じゃないんだ。むしろ俺、純粋って感じもしたんだ。」
fu

c.「あ、すいません。お客さんいないと思って。」「お客さんじゃないんだ。」
fu

d.「いいじゃない。」「そんなの嫌なんだ。」fu

e.「特別俺なんか…」「今のおとなしくて、頭がよくてエゴイストの新入社員の中に君のような人間を放り込めば、奴らに何が足りないかよくわかるんだ。」fu

また、現実主義と理想主義の対立も見られる。(36) の点線部は相手の現実的な主張で、波線部の「のだ」文は話者の願望が表されている。

(36) a.「だったら（一緒に住むのを）よしゃいい。よすなって言った覚えはない。」「あんたとここで暮らしていたいんだ。」fu

b.「(浮気を隠し通すのは）もうダメだね。」「それでも隠せるだけ隠したいんだ。」fu

相手の主張を先読みし、それを否定することによって対立的な立場をとるような用例もある。(37) の波線部の「のだ」文がそれで、(37ab) のような「～わけではないのだ」という形式や (37c) のような「～のではないのだ」という形式がもちいられ、相手が主張しそうなことを否定しているわけである。

(37) a.「つまり、僕はいい気持ちで格好よくスパスパと人とのつき合いを割り切ってるわけじゃないんだ。」fu

b.「ある線まで押してきたら、ガーッて立ち止まって文句あっかって顔してやればいいのよ。甘やかすとつけあがるわ。」「そう思ってるさ。事実そんなにへえこらしてるわけじゃないんだ。」fu

c.「(浮気をしたのは）1回だ。それでもそういうことがありゃ負い目がある。未練とかそういうんじゃないんだ。」fu

さらに、相手がなんらかの主張をしたわけではないが、(38) のような「のだ」文が用いられる例もある。相手が無意識に犯しているミスや行為に対して対立的な立場をとったと考えると、ここで議論した「のだ」の延長線上に考えられる[9]。この用法の特徴は (38a) では今現在「違う指でピアノを弾いていることに気づいていない」、(38b) では今「妹が危ない店にいることに気づいていない」、(38c) では「奏者は 116 小節の演奏を熟知していない」といったように相手の認識不足に対する注意を表すところにある。

(38) a.（ピアノを習っている生徒に対して）「この手が違うんだ。この手が！

お前は！」no

b.（店にいる妹に対して）「ここには飢えたオオカミみたいな学生達がいっぱいいるんだ。近寄っちゃダメだ。」ze

c.（演奏しているオーケストラに対して）「だから、ここは116小節に向かってクレッシェンドしてくんだ。116小節の頭がフォルテだろ。ここで転調して裏はすぐピアノになる。」no

5.2　異なる主体同一対象（非対立的）

同一対象についての相手の主張に対して話者が対立的な立場をとるわけではないが、過程と結果の連続性はないような用例をここで考察する。（39）では点線部は相手の主張であるが、それに対して話者は（39a）では「そうだよ」と相手の主張を認めながら波線部の「のだ」文で自らの主張を行っているし、（39b）ではひとに指摘されることは認めながらも、「これでも」でうけて「のだ」文で自分の他の側面を主張している。（39c）も相手の指摘をうけて自らの価値観を主張するという形になっている。さらに、（39d）に至っては、同一対象の「我がサークル」の売りを副助詞「だって」を使って累加するような例までこのなかに分類できるように思われる。

（39）a.「お前はあかん。俺の見込み違いやった。」「そうだよ。俺は指揮者になりたいんだ。」no

b.「近くに（東京）大学あるのに遠く（の大学）まで行ってるんだねなんて言われちゃう。これでも（配達に）東大へ時々は行くんだ。」fu

c.「うーん、せんぱいの部屋ってとってもきれいなんですけど、何かが足りない。」「はぁ？　なるべく俺は部屋に物を置かない主義なんだ。」no

d.「（我がサークルは）ビラだけは負けねえな、この3枚によ。」「実力だって負けねえんだ。」fu

5.3　異なる主体異なる対象

次に見る用例は異なる表現主体であるところはこれまでと同じであるが、対象も異なっている。（39d）は同じ表現対象に対して異なる表現主体が累加した例であるが、それと関連があると考えられる。（40）の点線部は相手の主張で、波線部の「のだ」文は話者の主張である。（40a）では両者は自分を表現対象としてそ

れぞれのことを述べているのであるが、「のだ」文では「指揮が見たい」という相手と類似の主張を副助詞「も」によって累加しているし、(40b) では両者は自分を表現対象としてそれぞれ「太っているが、痩せるように努力していること」「いい大学にいっているとは言えないが、かなり受験勉強したこと」を述べているが、それらが類似の主張であることが副助詞「も」の累加によって示されている。

(40) a.「あたしもね定期公演で千秋君の指揮を見たときからずーっと注目してたのよ。」「僕も今度はぜひ君の指揮を見たいんだ。」no

b.「私ばっかりどんどん太って。これでも随分努力したの。」(中略)「いいんだよ。僕もそうなんだ。」「(あなた) 太ってない。」「勉強だよ。自分で言うのも変だけど、これでもこれでもかなり勉強した方なんだ。」fu

5.4 同一主体同一対象異なる側面

ここからは同じ表現主体が同じ表現対象について述べる例を考察する。最初に同じ対象の異なる側面が「のだ」文によって表される用例を見る。同じ対象の異なる側面を述べるときには過程から結果への連続性はもちろんない。この現象は姫野 (1989) の「対照」と重なると部分がある。

話者自らの対照的な内面が表されている例は (41) の通りである。(41ab) では点線部のような願望があるのだが、行動に移せない対照的な内面があることを波線部の「のだ」文が表している。(41cd) の点線部ではそれぞれ空想、仮想的な推論が表され、波線部の「のだ」文では現実が示されている[10]。これらの場合、「でも」「けど」「だって」など逆接の接続詞や接続助詞で双方がつながれる。

(41) a.「僕だって強くなりたい。でも、怖いんだ。」ai

b.「でも、そういう具合にはいかないんだ。会いたくなる。」「会ったらいいじゃないですか。」「でも、そうなったら今度は感情がびっしり詰まった生活だろう。(中略) そんな面倒な世界へ入っていくのが怖いんだ。」fu

c.「俺はただ…たださ、なるべく笑って、冗談かましてバカ言って、あいつのいちばんいい時期がもっと楽しくなるようにって、そう思って…だけど、それができねえんだ。だって、あいつに隠しごとしてる間、

あいつの目まともに見れねえんだ。」ll

d.「（私達に）子供がいるとか一緒になっても、何年も何十年もたってるっていうんならそりゃ傷も深いかもしれないけど、2年にもなっていないんだ。」fu

次の例を見ると、必ずしも対立的な内面でなければならないというわけでもなさそうである。（42）では話者自らの気持ちを述べているが、点線部のような意向があることに続いて、もう一つの願望があることを波線部の「のだ」文が表している。「のだ」文は対照的な内面である必要はなく二つの気持ちを表すことができるようである。

（42）「ホントはすぐにウィーンに戻るつもりだったんだけど、向こうであたしが師事してる先生がしばらく自分のツアーで忙しいっていうから、まあいい機会だし、こっちでコンクールでも出てみようかなあと思って。それともう1つやりたいことがあるんだ。千秋君とオーケストラやりたい。」no

5.5　同一主体同一対象異なる表現レベル

同じ表現主体が同じ対象について述べるとき、相手の理解を得るために表現のレベルを変える場合がある。表現のレベルはより具体的な内容に変える方向とより抽象的、一般的な方向の二方向がある。

5.5.1　具体化

相手の理解を得ようとするとき、特に相手が理解不足だと思ったとき、話を一段落としてより具体的に伝えようとすることがある。そんなときに使われる「のだ」をここで考察する。（43abcde）では順に「え？」「うん？」「何？」「タイプ？」「いなくなったって？」といった相手の聞き返しをきっかけにして、波線部の「のだ」文で点線部より詳細な内容を伝えようとしている。相手の問い返しがきっかけとならなくても、相手に聞き分けがないと判断した場合は、（43f）のように点線部の主張をさらに強化するために具体的な表現をとり説得しようとする場合もある。

（43）a.「約束があるんだ。」「え？」「人とちょっと会うんだ。」fu

b.「なあちょっとからかってやるか？」「うん？」「オーボエとクラリネッ

トを入れ替えてやるんだ。」no

c.「ついくちばし入れちゃった。」「何？」「今夜あの人呼んであるんだ。」fu

d.「（彼女は）そういうタイプじゃないと思ったんだよ。」「タイプ？」「いろんな子がいるだろ。ああいうことは平気だって子は幾らだっているんだ。」fu

e.「ああ、男の方がいなくなってね。」「いなくなったって？」「あの晩あれから出てって、それっきり帰ってこないんだ。」fu

f.「なぜこんなチャンスに逃げるんだ。」「逃げてやしません。」「いや逃げてるよ。怖がってる。重役会議で質問されるのが怖いんだ。」fu

また、先行する発話の理由や意味を相手が理解していないとき、(44) の波線部のように点線部の発話をより具体的に表現する「のだ」文が用いられている。

(44) a.「（彼女に）声掛けなかった。」「どうして？」（中略）「ただ、嫌がってんの捜したみたいなのいやらしいだろ。とっさにどう言っていいかわかんなくて声掛けれなかったんだ。」fu

b.「関係実体は一方だけじゃ作られない。」「何よそれ。」「人間はいつも同じじゃないだろ。」「何のこと？」「1人の人間がこっちでは喋ったりこっちでは喋らなかったりするということは、それはそれぞれ相手をする人間のせいでもあるんだ。人間は関係によって変化するんだ。」fu

5.5.2 抽象化

具体化は先行する発話の内容レベルを一段落とすことによって相手の理解を得ようとする方策であるが、ここで見る抽象化は特殊な具体例よりは抽象的なレベルの方が相手の理解が得やすいと話者が判断したとき、あるいは相手に特別な例ではなくて一般的なこととして理解してもらいたいときにとられる手法である。(45abc) の点線部は実際の具体的な事象を述べているのに対して、波線部の「のだ」文はそれを抽象的なレベルにしてより一般化をはかり、相手の理解を得ようとしていると考えられる。(45d) では「言葉になまりがない」のは言語に限定されるのでなくて、一般的に「適応力がある」ということを主張しようとしていると考えられる。

（45）a.「こないだも家の庭に死体が埋まってると警察に通報した者がいてね。手の込んだ嫌がらせなんだ、まったく …。」ze

b.「あの子が背負ってる荷物はお前が考えてるよりはるかに重い。子供のお前が簡単にどうこうしてやれる問題じゃないんだ。」ll

c.「（ケンカしたとき）やっぱり呼吸戻ってこなくて、昔よくやったなんてのはダメなんだ。現役にはかなわねえ」fu

d.「京都だなんて全然思わなかった。なまりないじゃない。」「ああ、割と俺適応性あるんだ。」fu

5.5.3　補足説明

具体化の「のだ」の変種と考えられるのが補足説明の「のだ」である。主説明の後に続いて補足説明が「のだ」文で表される。5.5.1で相手の問い返しや理解不足に対して具体的な説明を「のだ」文で表した例を見たが、ここの「のだ」は相手の問い返しや理解不足の標示を待たずに話者自ら進んで追加的な説明を加えようとするときに使われる「のだ」だと考えられる。（46a）のように接続詞「ただ」をともなって、点線部の説明に対して波線部の「のだ」文で補足したり、（46bcde）のように点線部の説明に続いて補足情報を追加したりするようなときに「のだ」文が使われている。

（46）a.「そんな気ないよ。ただ、ああいうパーティーにいた人がこういうとこにいたんで驚いたんだ。」fu

b.「ああ …、（この写真）私のお兄ちゃん。蒸発中なんだ。」ze

c.「（こちら）明日美さん。（私と）同じ部屋なんだ。」ll

d.「ここが教養学部。一般教養とか生物の実習とかはここで受けてんだ。」ll

e.「へえ、（彼の勤めているのが）研究所って嘘なの？」「本当は五、六軒家庭教師の口を持ってて、それでやってるらしいって。でも普通の家庭教師とは違うらしいんだ。すっごく信用があって金も高いらしいんだ。」fu

6 まとめ

本稿は聞き手に伝達する目的をもつ「のだ」文を考察対象として、主として「のだ」文の意味を一連の事象の過程とその結果、あるいは一連の思考判断および認識の過程とその結果の関係性から分析した。その結果、「のだ」文には結果用法と過程用法と呼んでもよい用法があることが分かった。それぞれの特徴は次の通りである[11]。

(47) a. **結果用法**：過程から結果までの一連の事象の結果部分あるいは一連の思考判断・認識の結果部分が「のだ」文で表される。事象の結果は過程的な事象の直接的な結果だけでなく、間接的な結末も「のだ」文で表される。また、思考判断・認識の結果はその結果内容が「のだ」文で表される。さらに思考判断の結果に限って、判断結果をもとにしてとった行為も「のだ」文で表される。

b. **過程用法**：過程から結果までの一連の事象の過程部分あるいは一連の思考判断・認識の過程部分が「のだ」文で表される。この用法には、現況または言語文脈的な状況で必然的な結果である場合、意図的な結果である場合、認識状態が結果である場合、そして新たな状況が結果である場合の4つの下位分類がある。必然的な状況を結果とする「のだ」文はその過程を表し、その結果は非選択的であるという含意を持つ。意図的な状況を結果とする「のだ」文はその過程を表し、その結果は選択的であるという含意をもつ。認識状態を結果とする「のだ」文はその認知過程が表される。新たな状況を結果とする「のだ」文はそれまでの過去の状態が「のだ」文で表される。

例えば奥田（1990）は「ひきだし的な説明」の用法のなかに原因や理由の結果を表す用法を認め、「つけたし的な説明」の用法のなかに結果の原因や理由を表す用法を認めているが、「ひきだし的な説明」と「つけたし的な説明」といった相反する説明がなぜ同じ形式で表されるのかを説明することが難しいように思われる。しかし、本稿の記述は網羅的であり、まとまった体系性を持ち、結果用法と過程用法の相互関係だけでなく、その下位分類の相互関係もより明確に示せていると思われる。

ここで見ていただきたい例（48）は同一話者の一連の発話のなかで結果用法と過程用法が使われている例である。波線部の「のだ」文は結果を表し、点線部の「のだ」文は過程を表すと考えると、この一連の発話が意図した光景がまざまざとよみがえるように思われる。波線部によって「弁当を食べていたら、魚が空から降ってきた」という状況を分析的に特異な結果として先行させ、点線部によってそのときの過程的な状況を後に表現するというのはそんなに特異な表現手法ではないが、「のだ」文を使うとなんとも見事に表現できるのである[12]。

（48）「降ってきたんだ！　魚が空から降ってきたんだ！　雨みたいによ！　弁当食ってたんだ。そしたら急に暗くなってきてよ。」「魚が降ってくるわけねえだろ！」「ホントなんだよ！」ki

最後に、その他の用法に分類した5つのタイプについて若干考察しておきたい。異なる表現主体が同一対象について相手と対立的あるいは非対立的に言及する場合、話者は相手の主張を受けてそれに対してあれこれ思考判断をし、導き出した自らの主張を「のだ」文で述べていると考えられる。異なる表現主体が異なる対象について言及する場合、といっても異なる対象とは自分自身を指す例しか見当たらないのであるが、相手の発話をうけてなんらかの思考判断をした結果、話者自らのことを主張していると考えることができる。また同一表現主体が同一対象について異なる側面を述べるときも、ある側面について言及した後、さらに思考判断し、別の側面も語ることになったと考えることができる。また、同一表現主体が同じ対象について異なる表現レベルを用いて述べるときは、相手の理解の程度を勘案しながらの具体化あるいは抽象化であるので、なんらかの思考判断過程を経た結果が「のだ」文で表されていると考えられそうである。すなわち、その他の用法で議論したすべては結果用法から派生したものだと思われる。そして派生の根拠は過程から結果までの流れが不連続であることがきっかけであろう。

本稿は聞き手への伝達を表す「のだ」のなかから発話行為の根拠を表す「のだ」は議論を単純化するために除外した。包括的な考察は別稿に委ねたいが、(20)(29)のように話者の態度が現状で現れている過程用法と密接に関わりがあると考えている。また、冒頭で「のだ」を5つに分類したところについても、稿を改めて詳細に考察したいと思う。

註

1) 野田（1997）は（1a）の「命令」用法を「対人的ムード」に分類し、同時に「非関係づけ」に位置づけているが、本稿では「命令」を独立した用法と考えている。

2) 2文字の英数字はテレビドラマからの用例の出典を示す。llは『1リットルの涙』、aiは『相棒』、fuは『ふぞろいの林檎たち』、kiは『キイナ』、noは『のだめカンタービレ』、zeは『銭ゲバ』を指す。

3) 「のだ」文が先行し、発話行為を表す文が後続する例もたくさんあるが、厳密な意味で発話行為が先行し、根拠を表す「のだ」文が後続するタイプを「発話行為の根拠」を表す用法だと考える。

4) 発話行為については詳しくはSearle（1969）を参照のこと。

5) 「のだ」を取り去った「せっかくオケが振れる」は非文である。この言語事実は副詞「せっかく」はその語彙情報から結果用法の「のだ」を選択するという統語情報をもっていると考えることができる。

6) 次の波線部のように結果状態を表す「てある」に「のだ」が付いた文もこのタイプに分類されると考える。
「費用はもってやる。」「いや、そこまで…」「マン・ツー・マンを頼んであるんだ。」fu
「値段（の札）裏になってる。」「（値段は）聞いてあるんだ。」fu

7) 発話行為の後にその根拠を表す用例とよく似ているが、本稿ではこのような例を過程用法と考える。

8) この例も発話行為の後にその根拠を表す用例とよく似ているが、本稿では過程用法として考えている。

9) （1a）のような「命令」を表す用法に近い用法だと考えられるが、この用法は認識不足で現在犯しているミスに対する注意喚起を表すのに対して、「新規のユーザー2件つかむんだ」という例ではそのような注意喚起の機能がないので、本稿では別のものだと考えておく。

10) この例では点線部を思考過程、波線部の「のだ」文をその結論と考え、結果用法と考えることも可能である。

11) Sweetser（1990）は現実世界領域が認識領域や言語行為領域へmetaphorical mappingされると考えることによって、英語の多義語、歴史的意味変化の過程や助動詞の意味などが容易に説明できることを議論しているが、本稿でいう事象的なものと思考判断・認識の間にも同じようなmappingがあると考えている。

12) 結果用法の「のだ」を議論したところで、過程が表されている部分に「のだ」を付けても文意を保つことができる。例えば、（10b）の点線部分を次の波線部のように「のだ」文にすると、「あの時、君と会ったんだ。それから追い出されたんだ。」

は文意が保たれそうである。原文は結果の部分に焦点を置いたいという話者の意向が反映されるのに対して、この文はどちらにも焦点が置かれるという感じがする。

参考文献

青木惣一（1993）「「のだ」文の基本的意味をめぐる諸説の検討と今後の課題　「のだ」文に対する語用論的分析試案　その1」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター紀要』16　pp. 1–17.

石黒　圭（2003）「「のだ」の中核的機能と派生的機能」『一橋大学留学生センター紀要』6 pp. 3–26.

奥田靖雄（1990）「説明（その1）――のだ、のである、のです――」言語学研究会編『ことばの科学』4　むぎ書房　pp. 173–216.

菊池康人（2000）「「のだ（んです）」の本質」『東京大学留学生センター紀要』10 pp. 25–51.

久野　暲（1973）『日本文法研究』大修館書店

国立国語研究所（1951）『現代語の助詞／助動詞――用法と実例――』秀英出版

小矢野哲夫（1981）「「のだ」をめぐる諸問題」『島田勇雄先生古希記念　ことばの論文集』明治書院　pp. 215–232.

佐治圭三（1972）「「ことだ」と「のだ」――形式名詞と準体助詞（その二）」『日本語・日本文化』3　大阪外国語大学研究留学生別科　pp. 1–31.

佐治圭三（1991）「「～のだ」の本質」『日本語の文法の研究』ひつじ書房　pp. 223–230.

幸末英恵（2006）「「のだ」文におけるテンス・アスペクトの変容」『日本語文法』6-2 pp. 79–97.

田中　望（1980）「日常言語における“説明”について」『日本語と日本語教育』8　pp. 47–64.

田野村忠温（1990）『現代日本語の文法Ⅰ』和泉書院

名嶋義直（2002）「「説明のノダ」再考――因果関係を中心に――」『日本語文法』2-1 pp. 66–88.

野田春美（1997）『「の（だ）」の機能』くろしお出版

姫野伴子（1989）「「のだ」の機能と用法」『東京外国語大学日本語学科年報』11　pp. 15–23.

益岡隆志（1991）『モダリティの文法』くろしお出版

泉子Ｋメイナード（1997）『談話分析の可能性――理論・方法・日本語の表現性――』くろしお出版

山口圭也（1975）「「のだ」の文について」『国文学研究』56 早稲田大学、『論集日本語研究7助動詞』（1979、有精堂）に再録

Alfonso, Anthony (1966) Japanese Language Patterns, Vol.1. Sofia University.

Grice, Paul (1975) Logic and conversation. In Cole, P. and Morgan, J. (eds.) Syntax and Semantics, vol 3. Academic Press.

Searle, John (1969) Speech Act: An Essay in the Philosophy of Language. Cambridge University Press.

Sweetser, Eve (1990) From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure. Cambridge University Press.

付記：本研究は、科学研究費補助金基盤研究（C）（平成20～24年度「日本語における階層化された対話についての研究：終助詞「ね」「よ」「よね」を中心に」研究代表者中田一志、課題番号20520410）の助成を受けて実施した。

〈**キーワード**〉「のだ」、結果用法、過程用法、記述的研究、派生的用法

On *Noda*'s Result Usage and Process Usage

Hitoshi NAKATA

Targeting systematic descriptions on comprehensive grammar of *noda*, this paper concentrates on uses that transfer information to hearer, excluding those explaining the rationale for a certain speech act, simply to avoid excessive complexity.

Through the discussion, they are roughly classified into two, uses of result and those of process. The two usages are as follows:

Result Usage: *Noda* selects the result of a sequence of events that comprise process and result, or selects the result of a sequence of judgments or cognitions.

Process Usage: *Noda* also selects the process of a sequence of events that comprise process and result, or selects the process of a sequence of judgment or cognitions.